

子どもアドボケイトの役割/機能およびジレンマについて
ー子どもアドボカシーセンターでのインタビュー調査に依拠してー

同志社大学 ○小川茜 (010430)

[キーワード] 子ども、アドボカシー、アドボケイト

1. 研究目的

近年、児童福祉分野の制度改革や新しい体制の確立がなされている。児童福祉分野の中でも子どもアドボカシーは特に注目されているテーマの一つであり、2022年には児童福祉法の改正により子どもの意見表明権に関する内容が明記され、アドボケイト等による意見表明等支援事業が努力義務となった。

子どもアドボカシーに関する研究では、アドボカシーを受ける社会的養護の児童や職員に対する調査が行われており、アドボケイトの意義・課題が明らかになった(栄留, 2020)。しかし、活動を行う子どもアドボケイトに焦点をあてた研究は十分になされていない。

そこで、本研究を通して1) 子どもアドボケイトの役割/機能、2) 支援活動に伴うジレンマを明らかにしたい。

2. 研究の視点および方法

研究の視点として、ソーシャルワーカーの役割/機能およびジレンマとの対比に焦点をあてた。なぜなら、アドボケイトはソーシャルワークから独立しており、ソーシャルワーカーが抱えるジレンマと対比することによってアドボケイトの専門性を明らかにできると考えたからである。

研究の方法として、2024年12月～2025年2月にかけて子どもアドボカシーセンターZの関係者4名に個別に半構造化インタビュー調査を行った。役職は2名が理事、2名がアドボケイトであり、インタビュー時間は3名が2時間であり、1名が3時間だった。分析方法は、KJ法に依拠してコーディングを行い、分析した。

3. 倫理的配慮

本研究は、2024年10月16日に同志社大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会に承認された(申請番号 2024_0012)。

インタビュー開始前に、研究の趣旨・目的、結果の発表方法(学会/学会誌/修士論文等による報告)等に関して説明し、同意を得たうえでインタビューを実施した。本報告に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はない。

4. 研究結果

4. 1 アドボケイトの役割/機能

本研究では、アドボケイトの役割/機能について以下のことが明らかになった。

第一に、子どものビューに寄り添うことは、既存の大人優位の社会構造にある権力関係を、子ども優位の関係に転換することであることが明らかになった。

第二に、あらゆる利害関係団体から独立している第三者性を重視していることがわかった。

第三に、ソーシャルワーカーが実施する形態のアセスメントや介入といった専門的な技法を使わず、一市民として子どもとの関係を形成していることが明らかになった。

4. 2 アドボケイトのジレンマ

横山（2006）がソーシャルワーカーのジレンマとして「生活の医療的管理」現象と「ソーシャルワークの固有性」が見えづらい点を挙げるなど、ソーシャルワーカーのジレンマに関する研究が行われてきた。一方、アドボケイトのジレンマについては、先行研究が十分に行われてはいない。

本調査では、アドボケイトのジレンマとして以下のことが明らかになった。第一に、信頼関係の構築方法としての遊びが手段ではなく、目的となって終わるというジレンマが明らかになった。第二に、アドボケイトと職員の役割が明確に分かれていることに伴い、相互の無理解と対立を生む可能性があるというジレンマが明らかになった。第三に、子ども主導/守秘義務と権利擁護の観点からの介入のジレンマが生じることが明らかになった。

これらのジレンマに対して、アドボカシーセンター内でのスーパーバイザーとのネットワークによる情報共有と検討、子どもとの継続的な対話によって対処していることが明らかになった。

5. 考 察

本研究の結果から、アドボケイトはソーシャルワークから独立した役割として存在し、第三者としてサービスの監視、子どもの個別アドボカシー、機関や施設の改革にアプローチしつつ、独自の専門性や視点を持って子どもに関与していることが明らかになった。

本研究では、一つのアドボカシーセンターのみを調査していることに限界がある。今後の課題として、アドボカシーセンター内のアドボケイトの属性によるジレンマの違いや、アセスメントや介入を重視している他のアドボカシーセンターとの比較を行う必要があるだろう。

【参考文献】

栄留里美（2020）「児童養護施設における訪問アドボカシー実践の評価研究」『子ども家庭福祉学』20, 53－66

横山登志子（2006）「地域生活をめぐる精神科ソーシャルワーカーの本質的使命－2つのジレンマを手がかりとして－」『社会福祉学』46（3），109－121

堀正嗣（2024）「子どもアドボカシーの基本原理 子ども主導の意見形成・表明・実現のために」明石書店